

アイスクャンドル作り 札幌市立はまなす幼稚園（北海道札幌市）

（2年保育 4歳児）

2月2週目の金曜日

・ 宮の沢児童会館よりアイスクャンドルを数個いただいた。玄関先に並べ、登園時と夕方に点灯することになった。

☆ みんな気付くかな？ 何て言うかな？ …教師からは何も言わないで反応を見てみよう。

○ 登園時教師に報告してくる子、気付かなかった子、様々な反応がある。

「何かあったよ。」「アイスクャンドルっていうんだよ。」「知らない。」

→ 氷のきれいさ、火を灯したときの温かさをみんなで感じたいと考え、集まった時に保育室で点灯式を行うことにする。

・ テーブルにアイスクャンドルをのせ、保育室の電気を消してカーテンを引く。薄暗くなった保育室に子供たちの期待は高まる。そして灯がともる。

○ 子供たちからため息が漏れる。そして少しの間静かな雰囲気過ごす。

「ほわぁ…」「きれい」

→ このアイスクャンドルはバケツの水で作ったみたいだ
ということ話し、「りす組でもやってみる？」と提案する。

○ 「やってみる！」「大実験だね。」

・ その場でバケツに水を入れ、保育室の前に置いてその日は降園する。



月曜日

・ 休みを2日はさんだため、バケツの水はカチカチに凍っている。

☆ みんなこの氷のこと覚えているかな？またまた黙って反応を見よう。

○ 最初の何人かは所持品の始末をしたり、今日何をして遊ぼうか教師に話したりしている。そこにM男が登園し、「大実験どうなった？」とすぐに教師に尋ねる。それを聞いて周りの幼児が金曜日のことを思い出す。

「あーあれね。」「できてる？」

→ 「どうなっているか確かめるか」と窓を開けバケツを取り出す。

○ 「あー！固まってる！」「え？なにになに？」「見てごらん！」まず水が固まっていることに大喜びしている。そして氷の模様に気付いて「不思議だねえ。」と言ったり、その冷たさを感じて喜んだりしている姿も見られる。

・ バケツを逆さにしても出てこない氷。「カッチカチだね」と言いながら表面を触ったり、バケツを叩いたりしていると突然ごろんとバケツから氷が出てくる。

○ 「あーっ！！」「できた！」「大成功！」と大歓声。

「すごいね」「ちょっと！大成功だよ！」と友達同士で言い合ったり、後で登園してきた友達に知らせたりしている。

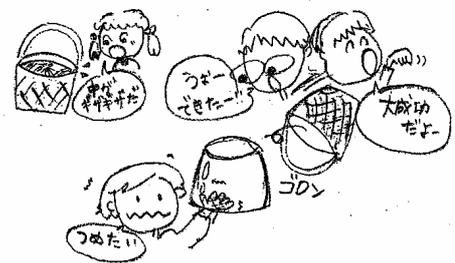
→ さっそく点灯式を始める。

○ 2度目の点灯式だが、ワクワクする気持ちは変わらない。灯がともるとまた温かい雰囲気が保育室を包む。そこに「作ってみたい。」と子供たちから声上がる。

→ バケツの数が少ないため、紙コップを用意する。「色付きにしたい。」と言う幼児もいたため、絵の具も出した。紙コップに名前を書き、自分で窓の下において楽しみにできるようにする。

○ 「固まるかなあ。」と心配する幼児、外に出しておけば必ず固まると思っている幼児など様々である。しかし絵の具を出してしまったため、色水遊びを楽しんでいる幼児もいる。

・ 保育室の窓の下に紙コップがずらりと並ぶ。



翌日から

・ 昨日の今日では表面は固まっても中はまだ水のものも多い。まただんだん冷え込みが緩んできている時期でもあった。

☆子供たちは固まっていない氷を見てどう感じるだろうか。

○ 登園すると自分の氷を気にする幼児がいる。表面を触ってみると固まっているので「大成功！」と喜んで喜ぶ。しかし、ひっくり返すと水がどぼっと出てきて驚く。「外はカチカチ、中はショボショボ、どうして？」なかなか固まらない様子に「まだ?」「寒いから固まらないんでない?」「!?」という声が多くなる。



ベンチの上に紙コップをのせた子と下に置いた子では氷の出来に差が見られ「雪の冷蔵庫の方が固まるんだわ」と言う。

紙コップを耳のそばで揺らし、「カチャカチャ音がしないのは凍ってるってこと」と自分なりの発見をしている姿も見られる。

・ 何日も置いておき、固まったものもいくつかあったが「家に持って帰りたい。」という気持ちに変わっていた。また暖かい日が続き、氷を作ることが難しくなった。

<考察>

- ・ 「水が氷になるなんて！」という不思議を感じたくて、アイスクャンドルをきっかけに氷作りが始まった。自分だけの氷を作ること、できるまでを楽しみに待つことなど氷に対する気持ちが高まったのはよかった。それをアイスクャンドルにしたいのか、氷ができたことがうれしいのかなどそれぞれの子供の気持ちをしっかり見取ったり、教師もどのように展開するかを明確にしていなかったことが反省である。
- ・ アイスクャンドルの素朴な美しさを感じ、いつもは歓声や絶叫を上げる子供たちが静かな雰囲気を楽しんだ。気持ちを大きく大胆に表す感動の仕方も大事だが、心に触れた静かな感動も育つ中で大切にしたい部分である。それが感じられるのはやはり自然だと感じる。「その季節、その時に味わえる感動は何だろう」と日々目を向けること、いろいろな人（教師、保護者、地域）との情報交換など大事にしていきたい。
- ・ この事例の中で子供たちは触って、揺らして、見て、凍ったことを感じている。また自分たちで作った氷が固まるまでにうまくいかない、どうしてなんだろうということも感じている。その一方で「大成功」の経験を十分に味わう機会が少なかった。氷を作るにあたって、紙コップではプラスチック製よりも保温性があったのではないかと、また色付きの氷にするために使用した絵の具が濃かったことで固まりにくかったのではないかとという考えが他の教師から出てきた。自分で作ったものが凍った経験と凍らなかつた経験を両方味わってこそ、その違いに気付いたり、不思議に思うことも深まったりすることをふまえ、時期や教材の吟味が大事であったと考える。
- ・ 自分なりに自然の不思議さを考えたり、教師や友達と思いを巡らしたりすることを楽しむことで、また何かに出会った時にそのものやことに対する興味や関心がぐっと深まり、自分なりのかかわりや考えを表現していくとを感じる。友達や先生と思いを巡らしたことの中に実は知りたいことの答えがあったり、後になって「やっぱりそうだった」と思えるような経験を積み重ねたりすることが科学する心につながっていくのではないかと。

みどころ

玄関先に置かれたきれいな「アイスクャンドル」。4歳児なりに思ったことや気付いたことなどのやりとりをしながら、氷でできていることやバケツを使って作れることなど分かってきたことを手がかりに、早速「やってみる」「大実験だね」と、遊びが始まりました。「大実験」ということばから、「できるだろう」という見通しや期待と、「自分たちで挑戦しよう」という難しいことに挑戦する意欲が伝わってきます。幼児なりに「水が寒い所で氷になる」ということや「氷」というものの知識があっても、実際にバケツの氷が出来上がると「大成功!」「すごい」という歓声上がるほど、感動体験をすることができました。大きく心を動かしながら観察したり触れたりすることで、自分たちの行った「大実験」の成果を味わい、「次は色付きにしたい」と新たな目当てを持って再挑戦する姿に結びついています。そして、「成功するはずなのに凍らない」という新たな不思議や疑問をもち、さらによく見たり気付いたことを伝え合ったりする姿が引き出されました。自然環境を活かして遊んだことで、不思議さや思うようにならない思いをしながらも、幼児なりに目当てを持って試行錯誤することを楽しむ経験ができました。